

思想史家としてのジョン・ロールズ 政治哲学者による政治思想史をどう受けとめるか？

犬塚 元(法政大学法学部)

- 1 政治思想史研究の現在時点
- 2 政治哲学者ロールズの政治思想史
- 3 政治思想史と政治哲学:ライヴァルかパートナーか

1 政治思想史研究の現在時点

- 政治学としての政治思想史(古典読解)への不信
 - 政治学からの批判、思想史学・歴史学からの批判
- ケンブリッジ学派(Q.スキナーら)の問題提起
- ケンブリッジ学派に対する反発
 - 好事家的探究・訓誥学・実証主義へ墮落、歴史か理論か
 - * 方法論(howの問い)の名のもとに、アイデンティティ探し(who, what, whyの問い)がさかんに
 - * 行為の非実証主義的・非因果的説明を意図(犬塚2019)
- 政治思想史と政治哲学・政治理論の分離
- 非実証主義路線の純化(Mark Bevir)
- 「テキスト解釈のサイエンス」(Adrian Blau)
 - 仮説検証の原理(推論のロジック)、不確実性の操作

2 政治哲学者ロールズの政治思想史

□歴史的ロールズ

- 歴史的存在、歴史研究の対象としてのロールズ
 - インダストリーの「新しい部門」(Katrina Forrester)
- 歴史研究者・思想史研究者としてのロールズ
 - 『政治哲学史講義』、『道徳哲学史講義』ほか

□『政治哲学史講義』の政治思想史

- ありきたりの、教科書的説明からはほど遠い
- 過去のテキストにつよい関心、きわめて緻密に読解
- 歴史学的な読みを掲げる。先行研究も咀嚼
 - コリングウッドの歴史主義、「チャリティの原則」
- しかし、自分の問題関心や視点から大胆に読解
- 別の政治構想からも学びうるという方法的態度

3

【ホブズ】

- ロールズの解釈するホブズは、rationalからreasonableを導いた(しかし社会的協働は論じなかった)世俗的・非歴史的思想家。自らの術語は用いてはいるが、これ自体はひとつのオーソドックスな解釈
- 他方で、神学、機械論、唯物論、貴族的情念、道徳的義務を強調するホブズ解釈は明示的に却下

【ロック】

- ロールズのロック解釈は、ラズレット、ダン、アシュクラフト、フランクリンらの研究を前提に、なおかつマクファーソンの「所有的個人主義」を批判する、という点ではごくオーソドックス
- ただし、社会契約にもとづく正統性原理を、理念的な歴史において社会契約で形成される可能性があったかどうかという問いとして消極的に解する(実際に社会契約でつくられたかどうかは問わない)点はユニーク
- 所有権論については、マクファーソン解釈を退けつつも、「無知のヴェール」の発想を欠いて偶然性を排除しえない点を批判。この文脈でJ.コーエンやスキャンロン、アッカーマンらを援用(なおノージックについては、歴史的背景を無視してロックを理解とって批判的に言及するのみ)

4

【ヒューム】

- ホッブズやロックをめぐる解釈が、20世紀の(比較的新しいものも含む)さまざまなモノグラフをふまえているのに対して、ヒューム解釈は、1)社会契約論批判に注目する、2)功利主義の系譜に位置付ける、3)市場経済に親和的な道德哲学と解する、などの点でオールドファッションで、ほとんどユニークでない
- テキストをめぐる事情(講義のテープ起こし)もあり、どんな文献を参照にしたかも不明瞭

【ルソー】

- ヒューム解釈と同じように二次文献への言及は少ないが、対照的に、ルソー解釈はきわめてユニーク(本人もそう自覚)
- 総じてルソーをリベラルな思想家として解釈し、1)よい利己心を前提に政治共同体を構想した、2)一般意志とは共通善をめざす市民の熟議的理性である、3)一般意志の観点は公共的理性の起源である、等とユニークに解釈
- 全体主義者解釈につながる側面(一般意志、立法者、自由への強制)には無毒化処置

5

ロールズの政治思想史理解をめぐる近年の代表的な解釈

- Whatmore 2021 ロールズの政治思想史アプローチは大きな影響力を及ぼした。自分の理論をテストして洗練させるために、政治思想史の古典を利用。関心は歴史ではなく思想にあり、政治思想史のテキストを現在のリベラリズムの観点から非歴史的に読解
- Bejan 2021 アーカイブ資料をふまえると、ロールズには政治思想の伝統への忠誠があり、彼の政治哲学は非歴史的・反歴史的でない。アーカイブでは、とくに、公刊されていない初期のコーネルやMITでの講義関連資料が重要。ターナー講義(1981)やPL(1993)で宗教戦争に注目、とされてきたが、以前から見られる観点
- Gališanka 2019 1960年代初頭まで功利主義の枠内という自己理解、以後は社会契約論の系譜に属すと転換。カントへの注目はKurt Baierの影響下で当初は人格、60年代半ばから自律や普遍性へ。他の理論構想からも借用可能と考えた。政治思想史に見られるのは各価値のウエイト付けの違いで、それゆえ競合する政治構想は両立可能、と理解
- Bercuson 2014 ロールズの政治思想はカントからの影響だけでは説明できず、reasonablenessや市民道徳についてはルソーとヘーゲルから。ルソー、カント、ヘーゲル解釈は特異で、アカデミックコンセンサスを拒否
- Frazer 2010 テキスト解釈には、「解釈における思いやり」の原則と、「解釈における謙虚さ」の原則の衝突があり、ロールズはしばしば後者を犠牲にして前者を優先

6

- 齋藤・田中 2021 「最初に「公正としての正義」というタームを明示的に用いたのは、一九五三年、コーネルでの初年度の講義であったようである。以後、彼は講義を通じてさまざまな思想家の著作に接し、自分の考えを発展させるスタイルをものにするが、この時期からロック、ルソー、カントの社会契約論との本格的な取り組みが始まっている。ただし先に見たように、当初ロールズは功利主義の枠内で正義論を考えようとしていた」(pp. 43-44)

『政治哲学史講義』では、ホッブズ、ロック、ヒューム、ルソー、ミル、マルクスが主に考察されている。ホッブズ講義では、彼が政治と信仰を分離可能だと考えていたのではないかという解釈がなされている。後述するように、これは政治的リベラリズムに通じる着想であり、この点でロールズはホッブズを高く評価している。…ロックは社会的・経済的不平等をさほど考慮しておらず、その立論からは「階級国家」が正当化されてしまうことも示される。ルソーはまさにこうした不平等の問題に向き合い、平等な市民からなるデモクラシーの理念を力強く提示した思想家として称賛される。…ヒュームとミルは功利主義の伝統を代表する思想家だが、ロールズはミルを高く評価する。…ロールズによれば、ミルは功利主義の立場から「公正としての正義」を支持しただろうとされるが、この指摘はきわめて興味深い」(pp. 114-115)

「ひとりの青年はこうして信仰の道から離れていった。だがそれは、宗教への関心自体の消失を意味しない。「私の宗教について」でもっとも興味深い点は、ジャン・ボダン(一五三〇～九六)への高い評価である。一六世紀フランスの宗教戦争に直面したボダンは、主権概念を新たに彫琢し、国家のもとでの諸宗教の共存を主張したことで知られる。このことを問答体で示したのが『七賢人の対話』である」(p. 187)

7

3 政治思想史と政治哲学：ライヴァルかパートナーか

□ 解釈共同体モデル

- スタンリー・フィッシュ『このクラスにテキストはありますか』
- 各解釈共同体で異なる前提・目的、共同体間で解釈競争
- さまざまな解釈の可能性を許容。しかし、So what?

□ Blau 2020 (「応用政治思想史」方法論(犬塚2019)の試みとして)

- 歴史的テキストの現代的活用
 - (1)新しさあるか、(2)現代に使えるか(価値や説得性があるか)
 - 不適切なテキスト解釈、不適切な現代理解による「失敗」
 - 失敗例は、古典(政治思想史)自体のレレバンスー揺るがす
- 「適切な読解」「拾い読み」「誤解」のいずれも現代に使える
 - しかし、「誤読」を使うと議論を弱めうるし、「適切な読解」を使うと議論は補強・改善されうる(思想史研究者とのコラボのメリット)

□ コラボレーションによる相互乗り入れ・相互補強

- 「正しい解釈ではない」に限定・条件を付す方法的態度

8

言及文献

- Bejan, Teresa M. 2021. Rawls's Teaching and the "Tradition" of Political Philosophy. *Modern Intellectual History* 18(4)(特集The Historical Rawls).
- Bercuson, Jeffrey 2014. *John Rawls and the history of political thought: the Rousseauvian and Hegelian heritage of justice as fairness*, Routledge.
- Blau, Adrian 2020. How (not) to use history of political thought for contemporary purposes, *American Journal of Political Science* 65(2).
- Frazer, Michael L. 2010 The modest professor: Interpretive charity and interpretive humility in John Rawls's lectures on the history of political philosophy, *European Journal of Political Theory* 9(2).
- Gališanka, Andrius 2019. *John Rawls: the path to a theory of justice*, Harvard University Press.
- Whatmore, Richard 2021. *The History of Political Thought: A Very Short Introduction*, Oxford University Press.
- 犬塚 元 2019「ケンブリッジ学派以後の政治思想史方法論」『思想』1143号（特集「政治思想史の新しい手法」）.
- 齋藤純一・田中将人 2021『ジョン・ロールズ：社会正義の探究者』中公新書